

施釉陶器の生産形態

—瀬戸窯を中心に—

愛知学院大学文学部 教授 藤澤 良祐

はじめに

こんにちは。愛知学院大学の藤澤です。本日はよろしくお願ひします。

先ほど中野さんから、中世陶器を生産した窯業地は、須恵器生産以来の須恵器系と、古代灰釉陶器の技術を継承する瓷器系を合わせて、全国で80カ所近くの窯業地が確認されていることが示されました(図1)。このうち、全てが瓷器系に属する東海地方の窯業地は、現在までのところ25カ所で確認されており、当地方は中世窯業の一大中心地でした。東海地方では、全ての窯業地で山茶碗が焼かれており、西から「美濃須衛型」「東濃型」「尾張型」「渥美・湖西型」「東遠型」の5つの類型に大別されますが、このような山茶碗生産がベースにあって東海の中世窯は成立しているのです(図2)。

さて今回、私に与えられたテーマは、中世陶器のうち、釉薬の掛かった陶器「施釉陶器」の生産形態を、瀬戸窯を中心に述べるということにあります。中世の施釉陶器は、瀬戸窯で生産された「古瀬戸」が有名で、かつては中世唯一の施釉陶器と言われてきましたが、発掘調査が進展した現在では、瀬戸窯以外にも施釉陶器生産が行われた窯業地の存在が明らかになりつつあります。

1. 中世瀬戸窯における施釉陶器生産

まず、中世瀬戸窯における施釉陶器の生産状況をまとめておきます。瀬戸窯のように連綿と施釉陶器を生産した窯業地は他には存在しません。古瀬戸は、灰釉のみが使用された前期(12世紀末～13世紀後葉)、鉄釉が出現し文様の最盛期である中期(13世紀末～14世紀中葉)、文様が廃れ日常容器の生産に移行する後期(14世紀後葉～15世紀後葉)の3段階に区分されます。ただし、中世瀬戸窯では、施釉陶器を専ら生産した古瀬戸

工人と、無釉の山茶碗・小皿を専ら生産した山茶碗工人とが存在しており、古瀬戸焼成窯と山茶碗専焼窯の時期別の分布状況(図3・図4)を分析すると、中世瀬戸窯は、以下に述べる3つの工人集団によって形成されたと考えられます(図5)。

(1) 第1集団

まず第1集団は、10世紀後半代に灰釉陶器を生産した、幡山区南部を出発点とする瀬戸窯の本流とすべき生産者集団です。彼らは12世紀中頃には幡山区北部に進出し、12世紀後葉になると東濃型山茶碗を生産するとともに施釉陶器を併焼する集団「古瀬戸工人」に成長します。13世紀前葉以降は山茶碗生産を捨て、品野区や瀬戸区さらには赤津区へと拡がり、後述する第3集団の一部を取り込んで古瀬戸焼成窯を経営し、施釉陶器専焼集団として瀬戸窯の中核を形成したものと思われます。彼らは、その後、大窯・連房式登窯を採用し、その生産技術は今日まで継承されています。

(2) 第2集団

第2集団は、11世紀後葉に守山区を出発点とする生産者集団です。灰釉陶器窯は極めて少ないのですが、11世紀末には急増し尾張旭市域へ拡がり、さらに12世紀中葉には水野区・今区へ進出し全盛期を迎えます。しかし、12世紀後葉には窯数は減少し、尾張旭市・水野区・今区の境界付近では初期の古瀬戸製品を併焼した可能性が残るものの、多くは東濃型山茶碗の専焼集団に転換したと考えられます。なお、13世紀前葉の東濃型山茶碗が市域では殆ど認められないことから、その後の動向は不明で、第1集団あるいは第3集団に吸収されたのか、陶器生産を放棄したのかは今後の調査に期待したいと思います。

(3) 第3集団

第3集団は、尾張型山茶碗を焼成した猿投窯の生産者集団「山茶碗工人」です。13世紀初頭ま

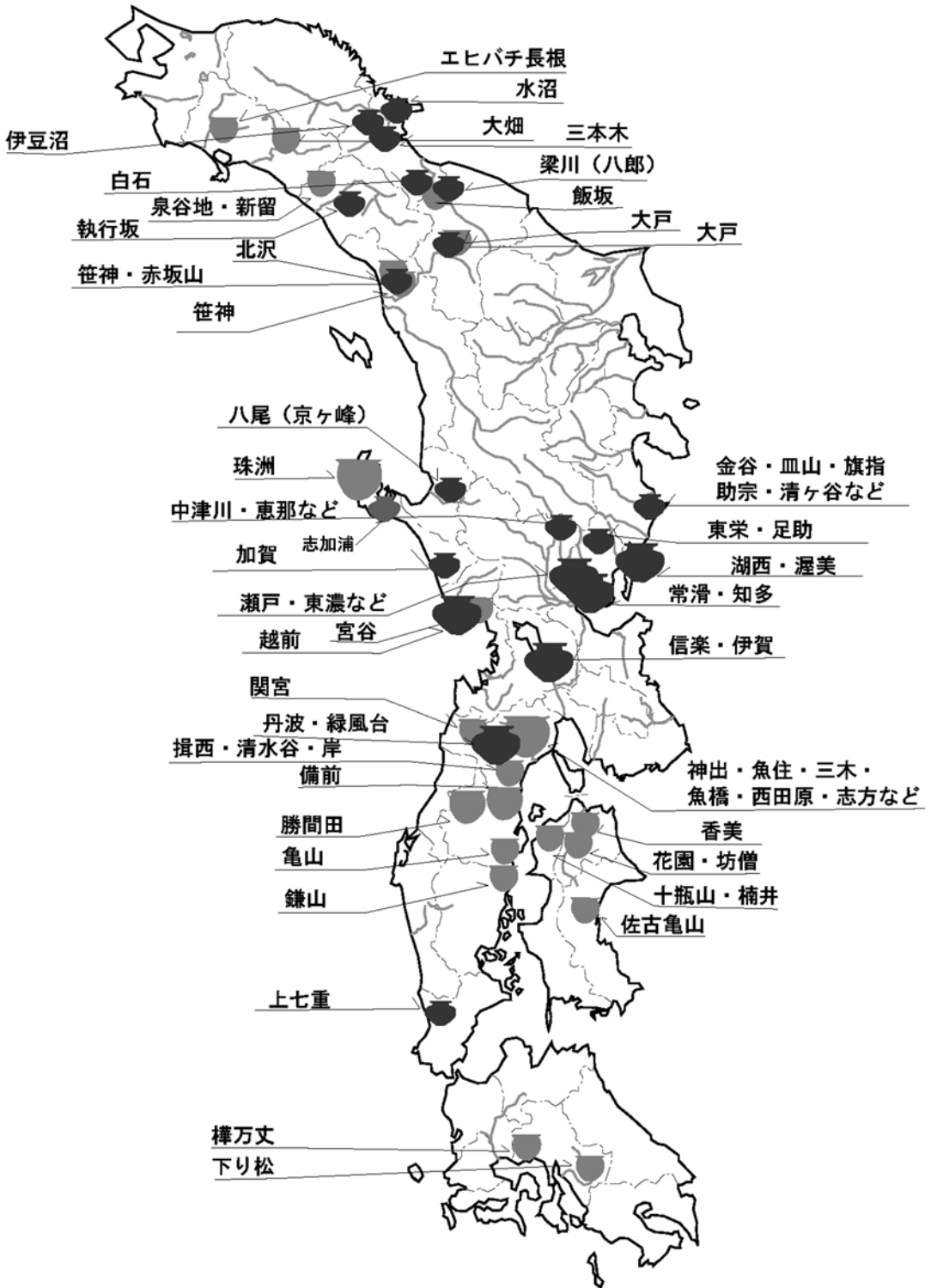


図1 日本の中世窠業地 (中野晴久作成)

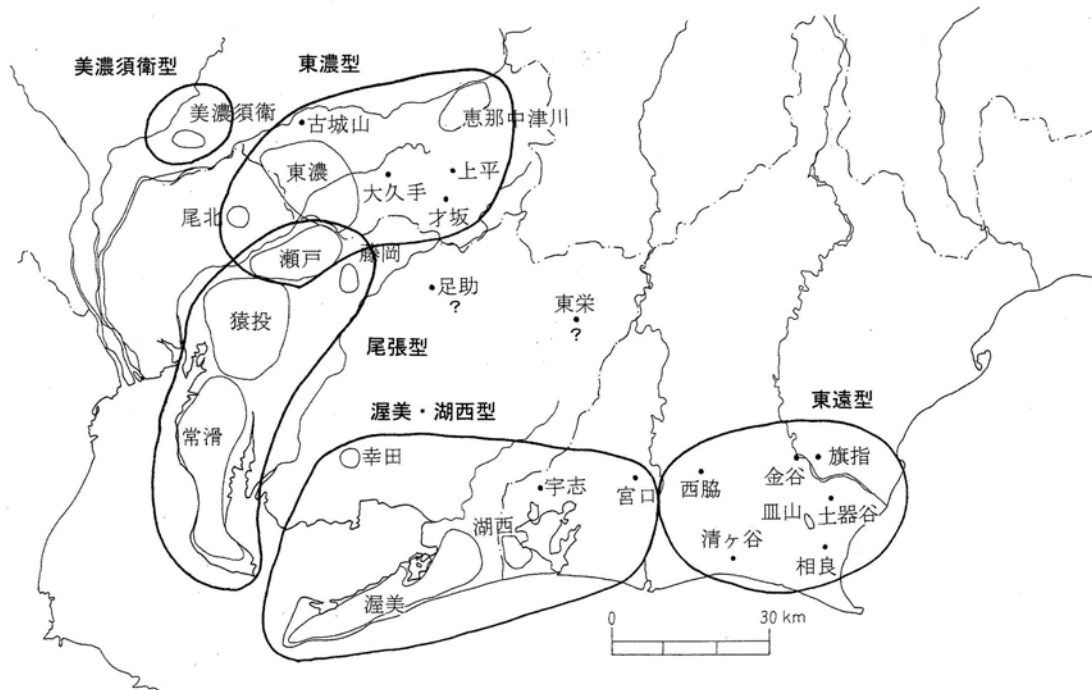


図2 東海地方の中世窯位置図(文献3に加筆)

での尾張型山茶碗は瀬戸窯には存在せず、13世紀前葉以降急増するのは、猿投窯の生産者集団の北上によると考えられます。つまり、13世紀前葉は中世猿投窯最大の拡散期で、彼らは日進市から長久手市、瀬戸市域の幡山区から水野区にかけて拡がり、13世紀中葉以降は赤津区にも進出したようです。元々は尾張型山茶碗の専焼集団でしたが、瀬戸入りするとともに一部は第1集団と接触し、施釉陶器生産にも関わりを持つようになったと思われる。

以上のように、中世瀬戸窯には古瀬戸工人と山茶碗工人とが存在し、中世瀬戸窯は一元的に形成された訳ではなく、古代の灰釉陶器の生産技術を継承する3つの生産者集団から形成されました。しかし、いずれも11世紀末頃には無釉の初期山茶碗生産に転換し、施釉技術は極一部を除いてみられなくなります。12世紀末頃には施釉技術が復活し古瀬戸様式が成立し、その生産技術は今日まで継承されます。すなわち、古代末期の灰釉陶器と古瀬戸との間には、約100年間の施釉技術の断絶が認められるのです。古瀬戸が「再興灰釉陶器」と呼ばれた所以はそこにあるのです。

2. 東海諸窯の施釉陶器生産

次に、瀬戸窯以外に施釉陶器が生産されている窯業地、渥美窯・湖西窯・東濃窯・恵那中津川窯などにおける施釉陶器の生産状況についてみていきましょう。

(1) 渥美窯

渥美・湖西型山茶碗の生産地です。12世紀代の山茶碗には、輪花があり灰釉が漬け掛けされますが、輪花山茶碗とセットとなる小碗・小皿には、輪花もなく灰釉も施されていません。また、国宝の秋草文壺や重要文化財の芦鷺文三耳壺には施釉されておらず、袈裟禪文や蓮弁文の壺・甕類の一部には灰釉が刷毛塗りされていますが、輪花山茶碗を除くと、全てのものに施釉した訳ではなかったようです。また、大アラコ窯や夕窯では、灰釉が施された壺が出土しており、灰釉四耳壺が生産された可能性があります。渥美窯における壺・甕類の生産は13世紀前葉には終了するようです。

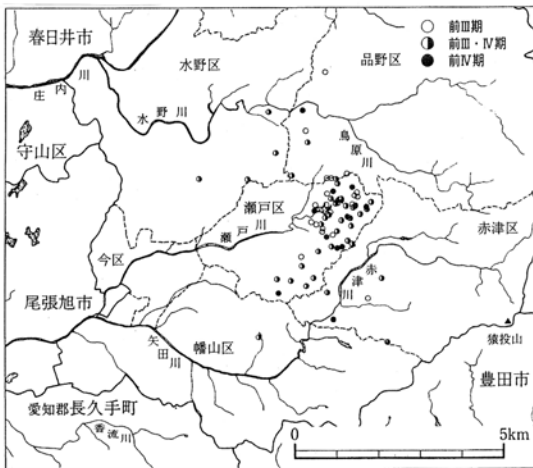
(2) 湖西窯

渥美窯と同じく、渥美・湖西型山茶碗が生産しており、12世紀代の山茶碗には輪花と施釉が一般的に認められますが、小碗には輪花も施釉もみ

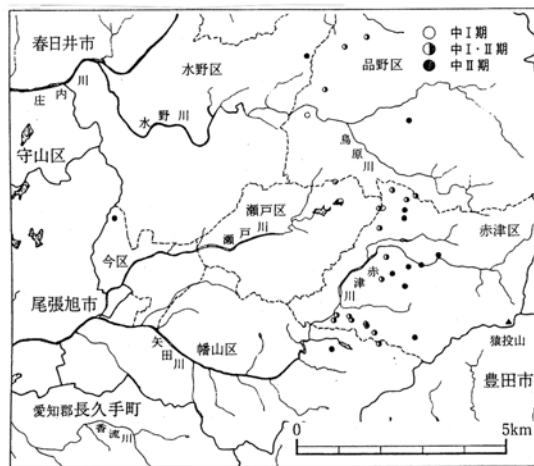
1 : 12 世紀後葉～13 世紀前半



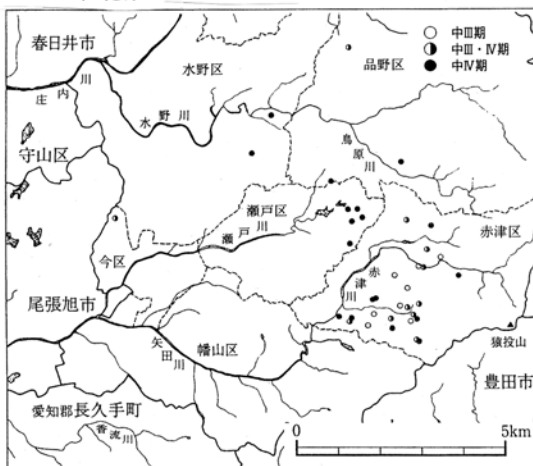
2 : 13 世紀後半



3 : 13 世紀末～14 世紀第 1 四半期



4 : 14 世紀第 2 四半期～中葉



5 : 14 世紀後葉～15 世紀初



6 : 15 世紀前葉～後葉

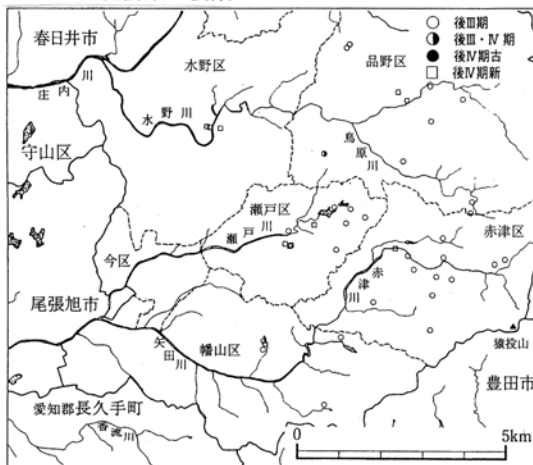


図3 古瀬戸焼成窯分布図(文献10より転載)

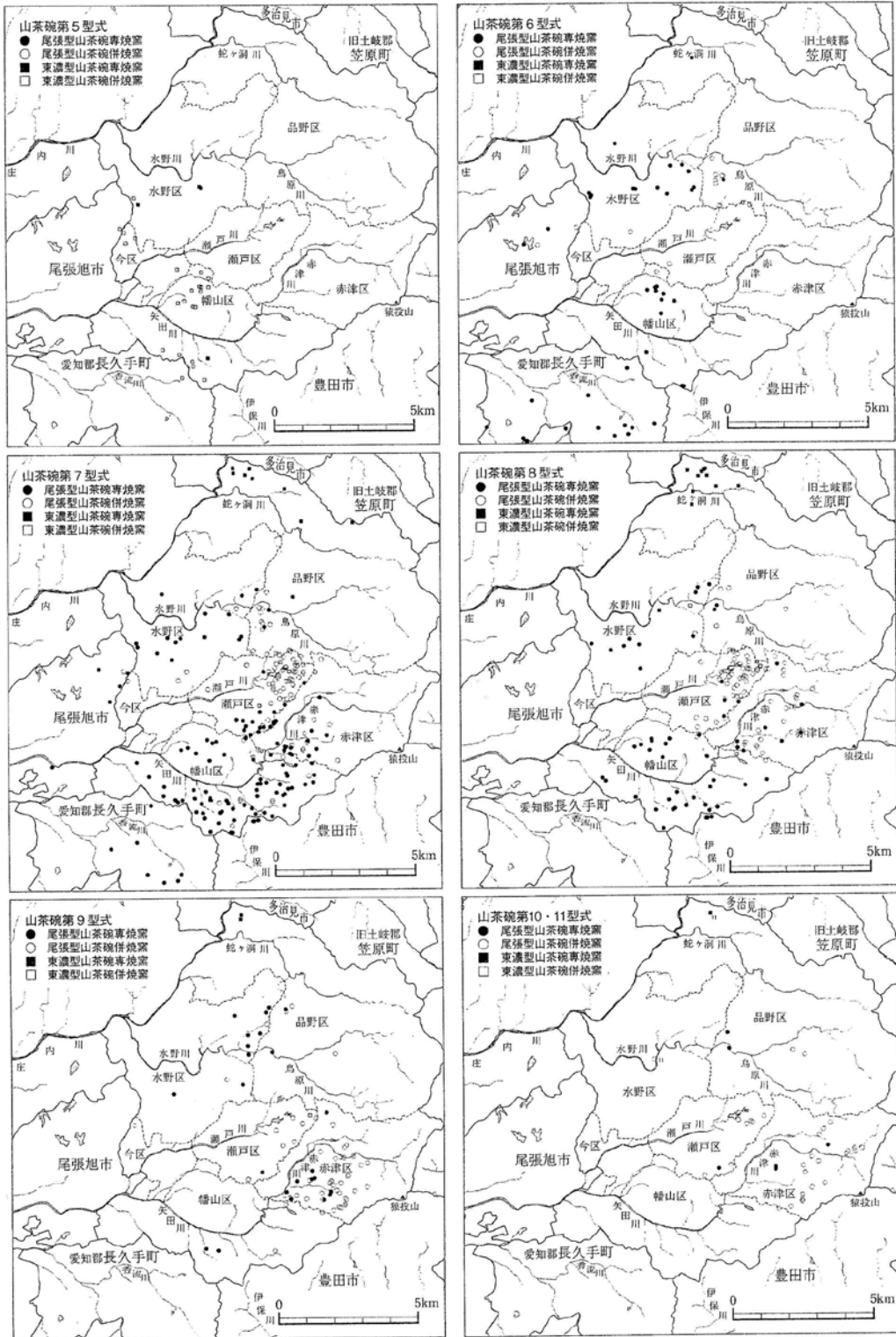


図4 山茶碗焼成窯分布図(文献10より転載)

第5型式: 12世紀後葉~13世紀初、第6型式: 13世紀前葉、第7型式: 13世紀中葉、

第8型式: 13世紀後葉~14世紀第1前半期、第9型式: 14世紀第2後半期~後葉、第10・11型式: 14世紀末~15世紀後葉

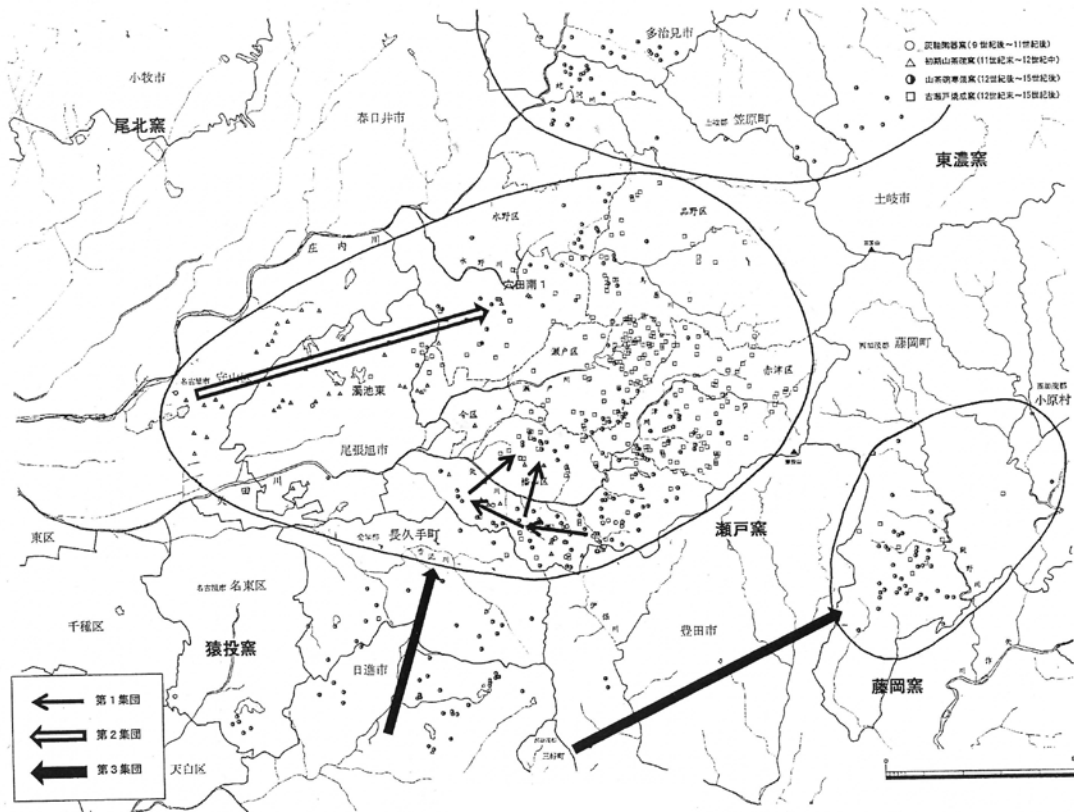


図5 中世瀬戸窯周辺の窖窯分布

られません。これまでのところ、渥美窯のような刻画文陶器は確認されていませんが、最近、灰釉が刷毛塗りされた小形の壺が出土する窯跡の存在が知られるようになり、渥美窯と同じく、施釉技法を有していたことは間違いありません。

(3) 東濃窯

東濃型山茶碗の生産を主体とする窯業地で、山茶碗類に施釉されたものはみられません。なお、15世紀中葉に瀬戸窯からの工人移動に伴う技術導入によって「古瀬戸系施釉陶器窯」が出現しますが、これについて今回は触れません。13世紀前葉を中心に浜井場3号窯（図6の11）・下石西山2号窯（図6の8）・土岐口西山3・4号窯・北小木大上8号窯・赤根曾窯（図6の7）では、全面に灰釉が刷毛塗りされた四耳壺・瓶子・水注などが生産されています。また、12世紀後葉の丸石9号窯（図6の9）をはじめ、13世紀前葉にかけて大藪迫間洞2号窯・畝欠田2号窯・一之

洞16号窯では無釉の四耳壺類が出土しています。

さて、東濃窯産の四耳壺類は、その形状や整形技法上の特徴から、東濃窯の独自性が強い下石西山2号窯・土岐口西山3・4号窯・赤根曾窯のもの、美濃須衛窯の製品に酷似する大藪迫間洞2号窯・畝欠田2号窯・一之洞16号窯・浜井場3号窯のもの、瀬戸窯の製品に酷似する北小木大上8号窯のものなどに大別されます。すなわち、東濃窯では、土岐市側を中心に東濃窯の独自性の強い四耳壺類を生産しつつも、多治見市北西部を中心に美濃須衛窯や瀬戸窯のものに酷似した四耳壺類を生産していたのです（図7）。なお、東濃窯では、これまでのところ甕類の生産は確認されていません。

(4) 恵那中津川窯

東濃型山茶碗を生産した窯業地ですが、13世紀前葉以降の窯が多く分布する中津川市側では、東濃窯のものとは異なった変遷をたどります。東

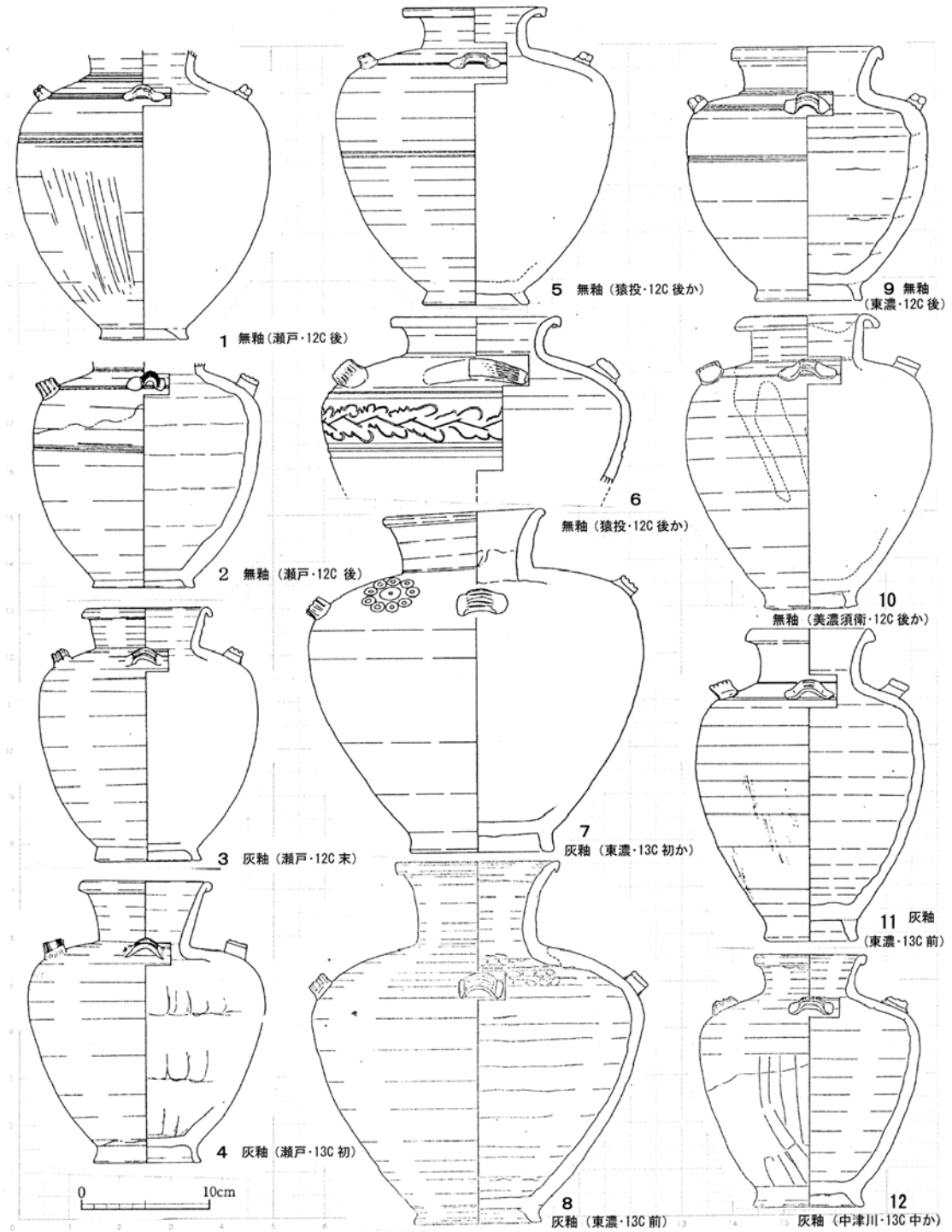


図6 初期四耳壺の諸類型 (文献3・6～10他より転載)

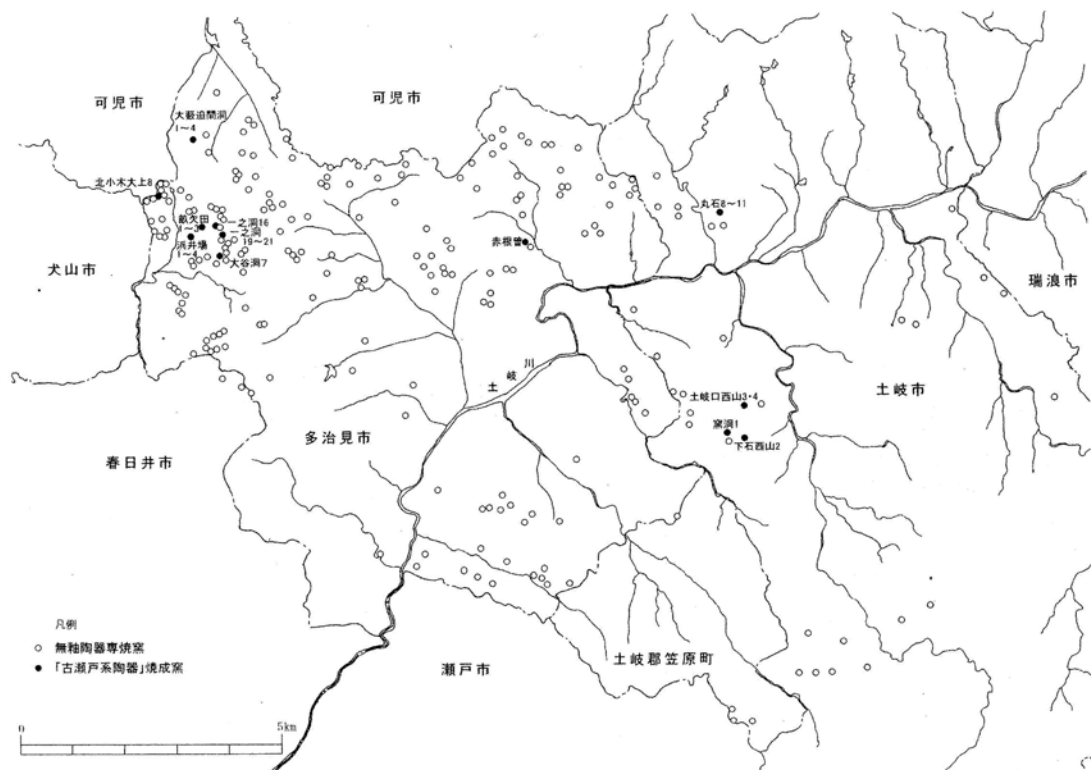


図7 中世東濃窯の窯跡分布図(文献9より転載)

濃窯と同じく、山茶碗類や片口鉢には施釉されたものはみられません。13世紀中葉から14世紀前葉にかけて、四耳壺と甕類の一部に施釉されたものが認められます。ただし、瀬戸窯や東濃窯のように全面に施釉されたものはなく、頸部から胴部上方にかけて灰釉が刷毛塗りされています。四耳壺は、上県2号窯・尻無1号窯・西山窯・窯平3号窯で出土しており、型耳を有するものの整形技法上の特徴から恵那中津川窯の独自性が強いものです(図6の12)。また、四耳壺より普遍的に生産された甕類は、常滑製品に酷似するものと、恵那中津川窯の独自性が強いものとに大別されます。

一方、12世紀代の窯が分布する恵那市側では、壺・甕類の生産が確認されていますが無釉で、四耳壺類の生産は未だ確認されていません。

3. その他の窯業地の特殊品生産

それでは、施釉陶器はほとんど生産されていま

せんが、東海地方における主要な窯場での特殊品の生産状況を見ておきましょう。

(1) 美濃須衛窯

独自の美濃須衛型山茶碗を生産した窯業地で、13世紀前葉までの操業と推測されます。山茶碗類は無釉で輪花もありません。12世紀後葉には、無釉でへう刻耳を有する美濃須衛型四耳壺が生産されました(図6の10)。また壺・甕類も生産されており、一部のものには胴部内面に「青海波」と呼ばれる当て具痕が認められるにも拘らず、胴部外面に叩き痕が磨り消されたものが存在します。

(2) 猿投窯と常滑窯

猿投窯・常滑窯とも尾張型山茶碗を生産した窯業地です。山茶碗類は無釉で輪花もほとんどみられません。両窯業地とも山茶碗類の生産は13世紀中頃にほぼ終了し、それとともに猿投窯は廃絶、常滑窯では甕類や鉢類が専焼されるようになります。中世猿投窯では、ほぼ12世紀後半代に

東山地区を中心に四耳壺（図6の5・6）・経筒外容器をはじめ屋瓦など特殊品の生産が認められます。その多くのもに刻画文や三筋文が施されていますが、施釉されたものは確認されていません。

一方、常滑窯は、東海地方で唯一、壺・甕類の生産が連綿と行われています。四耳壺をはじめとする特殊品はほとんど生産されていません。12世紀後半代を中心に三筋文壺が量産されますが無釉を原則とします。なお、上芳池窯では、残部全面に灰釉が施された四耳壺と思われる高台付の壺が出土していますが、これは極めて例外的です。

(3) 東遠諸窯

東遠型山茶碗を生産した東遠江から駿河西端にかけての窯業地です。14世紀前葉頃には生産が廃絶したと考えられています。山茶碗類を含めて施釉陶器は確認されていませんが、皿山窯では胴部内面に当て具痕、胴部外面全面に叩き痕がみられる特殊な壺・甕類が存在します。

4. 施釉陶器生産の成立と展開

(1) 施釉陶器の生産技術

以上のように、施釉陶器は、瀬戸窯以外にも渥美窯・湖西窯・東濃窯・恵那中津川窯では確実に存在しており、極めて例外的ですが常滑窯でも認められました。施釉陶器は、須恵器系中世窯はも

とより、東海地方以外の瓷器系中世窯でも生産されておらず、施釉技法は東海地方の窯業地のみ認められる技法です。

ただし、各窯場における生産器種の施釉技法のあり方には違いが認められます。まず、渥美窯や湖西窯では、12世紀代を中心に、山茶碗は輪花を有し口縁部には灰釉が漬け掛けされているにも拘らず、小碗・小皿は輪花もなく無釉です。また、渥美窯を特徴付けた刻画文・袈裟繻文・蓮弁文などの壺・甕類には、一部に灰釉が刷毛塗りされたものが13世紀前葉にかけて存在しますが、無釉が主体でした。

瀬戸窯では、12世紀末以降、古瀬戸前期様式の成立とともに四耳壺をはじめとする施釉陶器の生産が再開され、それ以降連綿と生産が継続しますが、12世紀中・後葉の「草創期」には、四耳壺生産が行われているにも拘らず施釉されていません（図6の1・2）。なお、12世紀中頃の穴田南1号窯では、灰釉が刷毛塗りされた山茶碗が出土していますが、これは極めて例外的で、共伴する小碗や三筋文系四耳壺、常滑窯製品に酷似した甕は無釉です（図8）。

東濃窯では、12世紀代の四耳壺には施釉されませんが、13世紀前葉には、様々な類型の四耳壺・水注・瓶子・洗などに灰釉が刷毛塗りされ、同時期には無釉の四耳壺も存在します。恵那中津

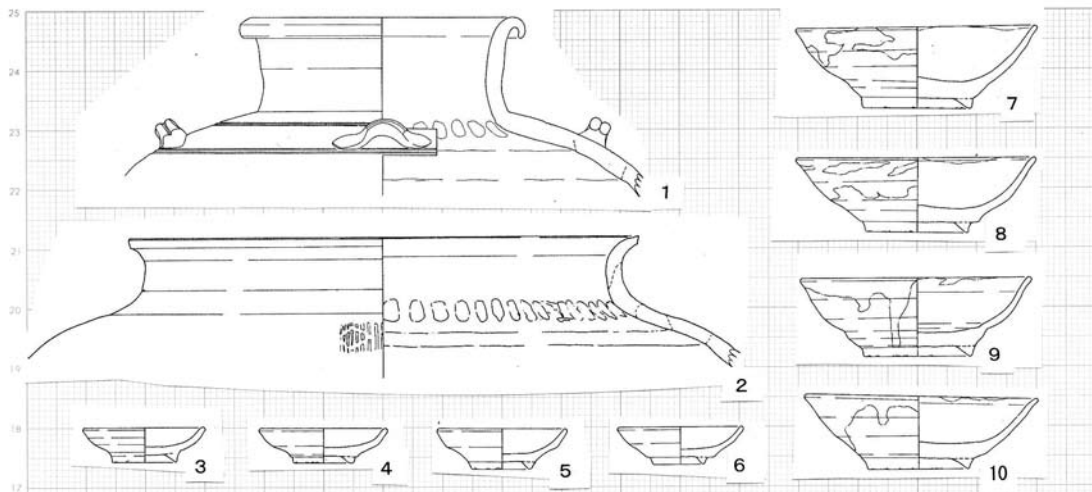


図8 穴田南1号窯出土遺物—12世紀中葉—（文献10他より転載）

1：無釉四耳壺、2：甕、3～6：小碗、7～10：山茶碗（灰釉刷毛塗り）

川窯では、13世紀中葉から14世紀前葉にかけて、全てではありませんが、灰釉が刷毛塗りされた四耳壺や甕類が一定量生産されています。ただし、瀬戸窯や東濃窯のように全面施釉ではなく、頸部から胴部上方にかけてのものでした。

このように、12世紀代から13世紀前葉にかけて、各窯業地での施釉技法は多彩で、多元的な発生状況を示しています。古代の灰釉陶器は、古代猿投窯からの一元的な技術伝播によって東海各地で成立したと考えられています。中世の施釉陶器の成立は、こうした図式では理解しにくいものがあります。もし、一元的な技術伝播であったとすると、12世紀代の渥美・湖西窯の施釉技法が、瀬戸窯や東濃窯に伝播したことになり、また、それぞれの製品の形状や整形技法は異なっているため、施釉技法のみが伝わったことになります。東海地方の中世窯の生産者が、古代の灰釉陶器生産者の末裔であったことを思い起こすと、東海の各窯業地、少なくとも渥美・湖西型山茶碗と東濃型山茶碗の生産地においては、施釉技法を潜在的に有していたと考えた方が良いと思います。

(2) 施釉陶器生産の導入と集約

各窯業地における施釉技法は、14世紀前葉まで生産された恵那中津川窯を除くと、ほぼ13世紀前葉を境にして瀬戸窯以外ではみられなくなります。そこまでの施釉陶器生産の流れをまとめておきます。

まず、ほぼ12世紀代の古瀬戸様式成立以前の状況については、輪花山茶碗に普遍的に施釉が確認される渥美窯や湖西窯では、小碗・小皿に施釉することはなく、渥美窯を特徴付けた刻画文陶器・袈裟襷文・蓮弁文の壺・甕類は、一般的には無釉でした。また、猿投窯を代表する三筋文系陶器・刻画文陶器や、常滑窯の三筋文壺には施釉されたものは全く存在しません。これは三筋文の施された四耳壺も同じで、猿投窯をはじめ瀬戸窯・東濃窯でも生産されましたが施釉の痕跡は認められません。美濃須衛窯や東遠諸窯では山茶碗類は無釉で、美濃須衛窯では独自の四耳壺類や壺・甕類が生産されましたが施釉の痕跡はありません。すなわち、古瀬戸様式成立以前、各窯業地では山茶碗

類をはじめ独自性の強いものを生産しましたが、四耳壺や壺・甕類は無釉が一般的でした。

それが、12世紀末の古瀬戸様式の成立とともに、四耳壺は文様が無くなり全面に灰釉が刷毛塗りされたものが登場します。東濃窯でもほぼ同時期に四耳壺・瓶子・水注などが施釉陶器として生産されます。なお、この時期には、渥美窯や湖西窯でも全面に灰釉が刷毛塗りされた小形の壺類が生産されているようです。

しかし、13世紀前葉には、東濃窯や渥美窯・湖西窯での施釉陶器生産は消滅し、山茶碗類の専焼へと移行します。この時期は、瀬戸窯において施釉陶器生産が本格化する時期であるとともに、甕類の生産が常滑窯に集約化されるのと同じ時期でもあります。瀬戸窯・常滑窯とも尾張の窯業地であることは非常に重要で、その背景には中世陶器の生産と流通に係る政治的・経済的要因が存在したものと思います。

(3) 技術の自生と技術の伝播

ここまで、東海地方の中世窯における施釉陶器の生産形態について検討を加えてきました。施釉技法は、東濃型山茶碗を生産した瀬戸窯や東濃窯をはじめ、渥美・湖西型山茶碗を生産した渥美窯や湖西窯で確認されるという多元的な発生状況を示しており、各窯業地ではそれを潜在的に有していた可能性が高いことを明らかにしました。

東海地方の各窯業地は、須恵器系中世窯とは区別されるように、古代灰釉陶器以来の生産技術を継承したことは明らかです。東海地方全ての窯業地で操業開始から生産された山茶碗類には、少なくとも5類型が存在しますが、各類型の山茶碗類は、古代灰釉陶器以来の、いわば自生した技術によって生産されたと考えられます。そして、その直後に生産が開始される甕類や四耳壺類に、各窯業地の独自性が認められたとすれば、やはり、それは自生した技術で生産されたと考えた方が良いと思います。

一方で、東濃窯では美濃須衛窯や瀬戸窯のものに酷似した四耳壺類、恵那中津川窯では常滑窯に酷似した壺・甕類が生産され、また今回は触れませんでした。古城山窯では常滑の甕類に、足助

窯では蓮弁文壺や常滑の甕に酷似したものが出土しています。それらの製品が地元のものとは区別できるとすれば、それは自生した技術ではなく、生産者の移動に伴うような直接的な技術伝播があったと判断することができます。

おわりに

これまでの中世窯の生産形態についての研究は、特定器種が存在や製品の類似性、施釉技法の有無といった視点から、一元的に語られることが多かったように思います。東海地方のような古代以来の窯業地では、それが自生した技術で生産できるのか、伝播した技術に依らなければ生産できないのかといった視点から、それぞれの窯業地の形成過程を解明することが必要となってきます。

今回は、生産器種の話を中心に進めてきました。先ほど安井さんや中野さんから、渥美窯と常滑窯の窯体構造についての話がありましたように、窯体構造の研究も生産技術の伝播を考える上で非常に重要です。例えば、瀬戸では甕類をほとんど生産しないことから、常滑や渥美にみられるような甕窯は一切存在しません。当時の生産技術は、生産器種ばかりでなく窯体構造にも端的に表れており、窯体構造の比較研究もさらに重要になってくると思います。

以上で私の発表を終わります。ご清聴いただきありがとうございました。

【引用参考文献】

- (1) 榑崎彰一 1965 「古代末期の窯業生産」『日本史研究 79』、同 1967 「古代・中世窯業の技術の発展と展開」『日本の考古学VI』河出書房、同 1972 「中世の陶器」『特別展中世の陶器』神奈川県立博物館、同 1977 「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館、同 1980 「中世の陶器」『原色日本の美術』小学館
- (2) 井上喜久男 1981 「猿投から瀬戸へ—中世施釉陶器の成立過程—」『名宝日本の美術第 12 巻古瀬戸と古備前』小学館
- (3) 助瀬戸市埋蔵文化財センター 1993 『東海の中世窯—生産技術の交流と展開—』
- (4) 吉岡康暢 1994 「中世陶器の分類」『中世須恵器の研究』吉川弘文館、同 2004 「中世窯業と“シマ”（島・半島）開発プロジェクト」『中世総合資料学の可能性』新人物往来社
- (5) 中野晴久 1996 「瓷器系中世窯」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—』、同 1997 「瓷器系中世陶器の生産」『研究紀要第 5 輯』助瀬戸市埋蔵文化財センター、同
- (6) 山内伸浩 2001 「13 世紀前半に生産された四耳壺・水注について」『北小木古窯跡群第 2 次発掘調査報告書』多治見市教育委員会
- (7) 助岐卓教育文化財団 2003 『丸石古窯跡群』
- (8) 助土岐市埋蔵文化財センター 2004 『下石西山窯跡発掘調査報告書』
- (9) 全国シンポジウム実行委員会 2005 『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』、藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『同発表要旨集』
- (10) 愛知県 2007 『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』
- (11) 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- (12) MIHO MUSEUM 他 2010 『古陶の譜中世のやきもの—六古窯とその周辺—』、井上喜久男 2010 「中世のやきもの—六古窯とその周辺—」『同展示図録』
- (13) 愛知県 2012 『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』

